

# 西谷町は今……

松井正幸

## ●はじめに

—西谷町を動かす三つの組織—

西谷町は昭和三十五年までは上星川町の一部であり、しかも飛地になっていた。西谷町という名前はまだ存在しなかったが、飛地のため町としての一体性は保たれていた。西谷町の前身である上星川町上部時代は、まだ戸数も少なく、農家を中心として、わずかな商店が軒を並べていた。西谷町ができたのが昭和三十五年四月である。その頃を境に、急に転入してきた住宅、商店によつ

て、現在の町並みがつくられていった。

現在の西谷町の地域活動を担っている人々は、大きく三つに分けられることができる。新しく転入してきた人を中心とした連合町内会、それから商店会、そしていわゆる「地付きの人」を中心とした消防団である。今までは、この三つの組織はバラバラに、それぞれの活動を続けてきたが、最近では、商店会が地域の活動を積極的にやりだして、連合町内会との連携をつよめている。三つの組織は、わずかであるが、少しずつ歩

み寄りを始めている。

そこで、この三つの組織を代表する人物に話を聞いてみた。

## ●新しい連合町内会長は女性会長

西谷連合町内会長 中山敏子さん

—主人のかわりに町内会に—

西谷連合町内会長に新しく中山敏子第一町内会長が選ばれた。女性の連合町内会長の登壇は、保土ヶ谷区の中では始めてのことである。

「じつは、今年こそ連合町会の役員も、それに第一町内会長もやめよ

- はじめに—西谷町を動かす三つの組織
- 新しい連合町内会長は女性会長
- 商店会の活性化をめざして
- 古いものを残していきたい
- さいごに—西谷町の活性化の条件とは…

西谷だよりを見る中山連合会長



うと考えていたのです。ところが、本田さんが連合町内会長をやめるといっただしたので、ぜひ本田さんに会長を続けてほしいと懇願したので。そのため、本当は第一町内会長もやめるつもりでしたが、本田さん

を補佐するため、今期だけやろうと  
考え直したのです。そうしたら、本  
田さんがやめてしまい、私に連合町  
会長の椅子がまわってきたのです」  
と開口一番、選出のいきさつを語っ  
てくれた。

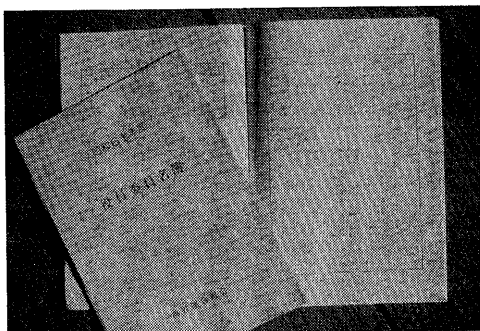
中山さんは、昭和二十年代に西谷  
町に移ってきた。ご主人は、中学校  
の校長先生をしており、最初は町内  
会にかかわることはなかった。

「主人が退職後六カ月で亡くなっ  
たのです。在職中から町内会の役員  
をやってくれといわれて、退職した  
らやるといっているうちに亡くなっ  
てしまったのです。主人のかわりに  
引き受けたのが、町内会活動にかか  
わりだしたきっかけです」。普通の  
主婦が町内会活動にかかわり出すう  
ちに、いつのまにか連合町内会長に  
なっていたというのが実感ではない  
だろうか。

—最初の仕事は役員名簿づくり  
から—

「町内会というのは、行政のタテ  
割りの最後のたまり場です。そのた

### 西谷連合町会役員名簿



めか町内会もヨコのつながりが悪い  
のです。今度、私はこんな役員名簿  
をつくったんですよ」と一冊の薄い  
冊子を見せてくれた。そこには、町  
内会から商店会、消防団まで、あり  
とあらゆる西谷町内の役員が一読で  
きるようになっていた。この名簿を  
見せてもらい、こうした名簿を今一  
番必要としているのは行政ではない  
だろうかと感じた。実際こうした調  
査をやっている、一番困ったのが、

各団体の役員の名前を調べることで  
あった。町内会長は地域振興係、子  
供会・体育指導委員等は社会教育係

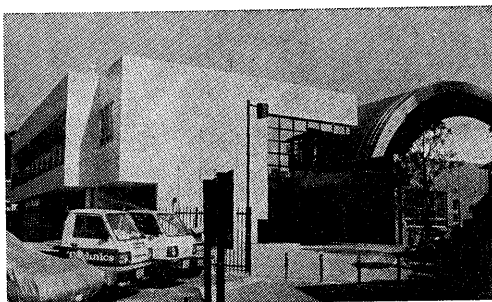
といったように、行政の中でもそれ  
ぞれの係にいかなくてはわからない。  
その上、商店会や消防団という  
と、どこへ聞きにいけばよいかと迷  
ってしまう。行政でも、このような  
状態であり、地域ではなおさらであ  
ろう。隣りの人が何の役職をやっ  
ているかも知らない。もしかすると、  
自分がいくつ役職を兼ねているかを  
知らない人もいるかもしれない。

—商店会とのつながりが強まる—

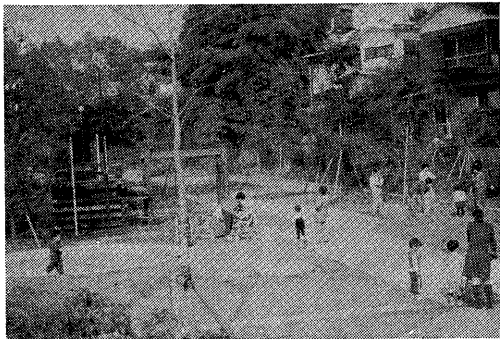
「今の西谷町は問題が山積してい  
ます。大変な時期に連合町会長をひ  
きうけたものだと思います。公民館  
と保育園の建て替え問題。それに地  
区センター建設で新しくおきてきた  
消防団の器具置場の移転問題。せめ  
で、これらの問題に解決のメドをつ  
けてやめたいと思います」と新会長  
の抱負を語ってくれた。

西谷町では、今年新しく二つの施  
設があいついでオープンした。その  
一つは西谷地区センターであり、も  
う一つは逆田橋公園である。今まで  
人が集まれる場所としては、公民館

### 西谷地区センター



### 逆田橋公園



しかなく、しかも公民館も保育園と  
して使用され、十分に使える状態に

## 西谷地区センター開館式



だ店を廻ってくれる気がつかいもしてくれました。町内会も商店会も同じ目的で力を合わせる事ができてよかったと思います」

難問が山積している反面、連合町会と商店会のつながりはゆっくりとではあるが強まっている。

### ●商店会の活性化をめざして

西谷商栄会副会長 石崎和彦さん

「わかし会」のリーダーとして――  
西谷商栄会の副会長の石崎さんの家は、戦前から店を開いていた数少ない店である。戦前から店を開いていたのは、現在西谷商栄会に加盟している百二十五店のうち十七店ほどである。戦前はおじいさんが米屋をやっており、戦後になりお父さんが薬屋をやりました。薬剤師の資格がなく、雑貨屋などもやり苦労したこと。そして、今の石崎さんはお父さんの跡を継いで薬局の店主としては二代目である。

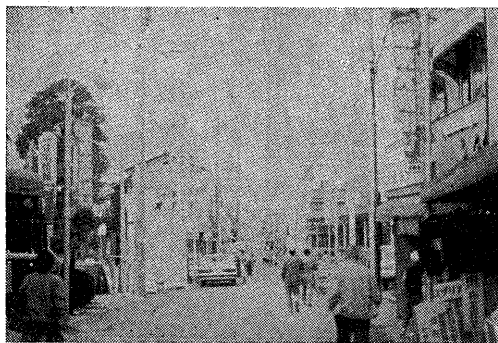
「西谷地区センターの開所式では、はじめて、テーブルを飾る果物や食物を地元の商店に頼みました。その時、商店の皆さんが予算よりいものをテーブルに並べてくれましたよ。そのうえ、商栄会の副会長の鈴木さんは、オープンの前日に頼ん

「両親は川島小出身だが、自分は私立の学校に行き、地元の小中学校

を出なかったの、地元の同級生と顔なじみになることもなく、また石崎の息子ということも知られていず苦労しました。最初、お店に立っていても、誰からも声をかけられず、一年ぐらいいは小間使いのようなことをしていました。そのうち顔もおぼえてもらうことができました。自分の子供には、こうした悲しい思いをさせたくないの、地元の小中学校に行かせています」

石崎さんは店を継ぐために薬剤師の資格をとって、今の店を手伝い始

## 西谷商店会



めたのは昭和四十五年頃である。それまでは、店の手伝いもありましたが、それが無いという。石崎さんは西谷町の生まれであるが、西谷町に本当に住み始めたといえるのは、店を手伝い始めたころからではないだろうか。子供の頃は、どちらかということ。子供の頃は、どちらかということ。自分の生まれた町になじめず大人になって向きあわなくてはならなくなつた。このことが、石崎さんを今の町に安住させないで、冷静に、町をそして商店会を見る目を養っていったのではないだろうか。今までの商店会の活動にあきたらなかった。石崎さんは、新しいグループ「わかし会」の結成に向かっていた。

「わかし会」は昭和五十年に若い商店主二十人ほどで結成した。メンバーの大半は昭和四十八年から五十年にかけて転入してきた三十代の若い店主たちである。最初は商店会とは一線を画して、商店会活動以外の活動にとりくんで来た。献血や、いろいろなテーマで講師を呼び座談会をやるなど、さまざまな催し、行

ふれあい工作展（商栄会）

事が続けてきた。石崎さんは、以前から自分の店の売上げだけを考



いるだけではだめで、もっと地域全体のことを考えた活動を商人もすべきだという考えをもっていた。こういう考え方に共鳴したメンバーでやり始めたのがきっかけである。

—青年部から商店会の中心に—

「わかし会の活動をやっていくうちに、商栄会の方から青年部の活動としてやってみてはどうかといわれ、商栄会の組織の中に入って活動を始めたのです。そうこうしているうちに、二年程前に、商栄会の幹部がまとめてやめてしまったので、我々青年部のメンバーが商栄会の役員の中心になっていったのです」

今までは商店会とは別の独自の活動をしてきた「わかし会」のメンバーも、今では商栄会の中心メンバーになっている。このため、商栄会の活動や自分の店のことで忙しく、従来からの行事や地域活動にさく労力と時間が減りはじめてきた。そのうえ商栄会活動に伴う気苦労も多く、最近では活動の回数が減ってきている。

「西谷の場合、昔からの店で自分の土地、自分の店を持っている店主は、それなりに生活できるので、商栄会の活動も消極的です。かえって借家で外から最近転入してきた人の方が、西谷はこのままでいいのかという危機感をもっていますね」

—これからは環境整備に力を—

「東京電力に商店会沿いの電柱の整理を頼んだところ、以外に早く実現できることになりました。そこでこの間一軒一軒調査で廻った時、多くの人は協力的でしたが、中には自分の都合ばかりという人がいて本当に困りました。これからは売上げの倍増活動ばかりでなく、商店会の環境整備に力を入れていかななくてはだめだと思えます。その先がけとして電柱の整理にとり組んでいきたい」とこれからの抱負を語ってくれた。この電柱の整理事業の背景には、地区センターのオープンがある。今年の七月二十六日に地区センターが商店会の真中にオープンした。現在の調査で一日三百人の出入りがある。こ

の人たちをほおっておくことはない」と石崎さんたちは考えている。そのためにも、安全で歩きやすい商店会をつくらなくてはならない。地区センターの建設をきっかけに商店会の活性化をはかりたい。これが石崎さんの願いである。

●古いものを残していきたい

西谷噺子保存会 白井寅吉さん

—一度とだえた噺子を復活して—

西谷噺子は神田噺子から派生してきたものといわれている。戦前から農家を中心に祭礼の時に盛んにおこなわれていた。白井寅吉さんは子供の頃におぼえ始めた西谷噺子を今に伝えている。戦後、西谷噺子をやる人が減り、一度とだえかけた。つい五年程前に農家の若い人を中心に西谷噺子保存会がつくられた。

「上星川の杉山神社の祭礼でやっていたが、遠く離れていて、西谷の方には噺子が聞こえないので、こちらでも同じ日に祭り噺子をやるようになった」と西谷で噺子が始められ